

韓国人日本語学習者による切断・破壊動詞の使い分けの習得

薛惠善 (ソル・ヘソン)

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 日本語教育学講座 博士後期課程

realsunsg@gmail.com

1. はじめに

1.1 研究背景

ある出来事をどのような動詞を使って表現し、どのように他の出来事と切り分けているかは、言語によって異なることが知られている。その中でも一続きの物を切断・破壊する (cutting & breaking) 行為は人間の活動において重要であり、異言語間においても共通して存在する出来事であるが、それをいくつかの動詞を使ってどのように線引きをし、区別するかは言語により異なる (Majid, Boster, & Bowerman, 2007)。また、切断・破壊事象を同数の動詞を使って切り分ける場合でも、言語間でその切り分け方は一部異なる (Fujii, 1999)。例えば、壁やドア、金庫を「破る/壊す」動作は、韓国語では紙を「破る」際に用いる動詞では表わせず、紙を半分に「折る」動作は、韓国語では鉛筆を両手で「折る」際に用いる動詞では表せない。本研究では、このような動詞の使い分けにおける言語間の相違が、日本語学習者の動詞の使い分けの習得にいかに関与するかを検討する。

1.2 先行研究と本研究の目的

切断・破壊のように、一つの意味カテゴリーに分類される様々な事象をどのような動詞を用いて表現するかに関しては、子どもの第一言語習得においてもいくつかの研究がなされている。このような研究では、より適用範囲が広い特定の動詞 (例. break) を過剰般化する傾向が見られる (Bowerman, 2005 他)、母語においても動詞の意味関係を整理して使うことは容易ではなく、大人のような使い方をするまでは時間がかかるとされている。第二言語習得における学習者の動詞の使い分けの習得研究においても、類似した傾向が見られる。第二言語環境で学習する中国語学習者を対象に、中国語学習者の動詞の使い分けの習得について調査した佐治・梶田・今井 (2011) は、学習者の使い分けは中国語母語話者の使い分けと大きく異なり、学習者は参照範囲の広い動詞 (拿 '持つ') を使用すると同時に L1 動詞のパターンと類似した使用パターンを見せることを明らかにした。なお、綱井 (2013) は「壊す/break」に関連する破損系動作に対し、英語母語話者が複数の語を用いる場面に日本人英語学習者は break を頻出する傾向にあり、学習者は、L2 母語話者とも L1 母語話者の使い分けとも異なる独自の使い分け方をするとしている。日本語の動詞の使い分けに関する習得研究である松田 (2000) は、日本語学習者は母語話者が容認、産出しない「割る」を容認、産出する傾向にあり、上級学習者にも安定した言語直感が培われていな

いとした。松田は学習者の誤った運用には、母語の語彙知識が深く関与している可能性があるとは指摘しているが、複数の言語話者を対象にしているにもかかわらず L1 の動詞の使い分けに関する調査は行っていないため、言語による事象の切り分け方の違いが L2 習得にどのように影響しているかは明らかにしていない。また、「割る」という限定された破損事象を対象にしており、より様々な破損事象における使い分けまでは調査していない限界があると思われる。そこで本研究は、異なる言語で切断・破壊という一つの 카테고리内の意味的に隣接した複数の動詞をどのように使い分けるかに着目し、異言語間の動詞による切断・破壊事象の切り分け方の違いが、様々なイベントに対する動詞の使い分けの習得にどのように影響するかについて説明を試みる。

2. 研究課題

先行研究が指摘した、同一事象における L2 学習者と L2 母語話者の動詞の使い分けの相違と、そこに見られた L1 の影響や L1 に関係なく特定動詞を汎用する傾向に基づき、本研究では以下の 3 点を研究課題とする。

2. 1. 上級レベルの日本語の第二言語学習者において、日本語学習者の切断・破壊動詞の使い分けに日本語母語話者との違いが見られるか。
2. 2. 日本語学習者の切断・破壊動詞の使い分けにおいて、適用範囲が広い特定動詞の汎用が見られるか。
2. 3. 日本語学習者の切断・破壊動詞の使い分けにおいて、L1 の影響が見られるか。

3. 本調査

3. 1. 調査材料

本研究の調査では、切断・破壊事象とそれに関連する複数の行為をビデオ化し、様々な言語話者がそれぞれの行為をどのように言語化するかを調査する目的で作成された先行研究 (Bohnenmeyer et al., 2001) の材料を使用した。この材料は、行為者の出現有無・使用道具・対象物の性質・破壊や切断の仕方が異なる、様々な物の切断・破壊をビデオ化した 61 個のビデオクリップで構成されているが、その中で英語の open, pull apart, peel で表される、切断・破壊事象ではないと思われる 14 場面はフィラーとして扱い、47 場面を調査項目とした。

3. 2. 被調査者

被調査者は日本の大学の学部と大学院に在学している韓国人日本語学習者 10 名であり、全員が日本語能力試験 1 級あるいは N1 を取得している。平均日本語学習歴は 66 ヶ月で、日本滞在歴は平均 20 ヶ月であった。彼らには L1 知識との関連性を検討するために、同じ調査材料で韓国語 (L1) による運用も調査した。比較群として日本語母語話者 7 名にも同じ調査を行った。

3. 3. 調査方法

調査はパソコンの画面上に提示されるビデオを見て、各ビデオで起こっていることを一つの短文で描写させる形式で行った。各ビデオ終了後 10 秒以内に文を言うように求め、回答が終わったら次のビデオに進むようにした。解答を容易にするために各ビデオに登場する対象物の名前や使用した道具の名前は画面に提示した。

3.3. 調査結果

3.3.1. 産出動詞の比較

各グループ（韓国人学習者の日本語産出、日本語母語話者の日本語産出、韓国人学習者の韓国語産出）により産出された動詞の内訳と数を表 1 に示す。

表 1 各被調査グループによる産出動詞の内訳と数

グループ	産出動詞の内訳	動詞のタイプ数
韓国人学習者(日本語)	切る、破る、 <u>壊す</u> 、折る、分ける、割る、ちぎる、 <u>とる</u> 、叩く、穴をあける、 <u>つぶす</u> 、 <u>絶つ</u> 、 <u>押す</u> 、 <u>貫く</u> 、刺す、その他	16
日本語母語話者	切る、折る、割る、ちぎる、破る、 <u>裂く</u> 、 <u>砕く</u> 、穴をあける、叩く、刺す、 <u>曲げる</u> 、 <u>つく</u> 、分ける、その他	14
韓国人学習者(韓国語)	caluta, kkunhta, pwuletulita, ccicta, pwuswuta, ttutta, kkekta, ccokayta, kaluta, naylichita, peyta, sselta, nanwuta, ukkayta, tacita, ccikta, kusta, olita, kumengtwulhta, その他	20

注：下線部は、どちらかのグループだけが産出し、他方のグループでは産出されなかった動詞。

動詞は全場面において出現数が多かった順に並べてあり、「切る」は学習者と母語話者両グループにおいて最も産出された動詞である。ただ、母語話者が別の動詞で使い分ける場面においても、学習者は「切る」を代用する傾向にあった。なお、学習者と母語話者グループの産出動詞の数と内訳は異なっており、学習者と母語話者が同じ場面に対しても異なる動詞を用いて産出していた場合があることがわかる。この中には L1 の影響である項目とそう考えられない項目があった。例えば、「ハンマーで花瓶を割る」場面などに現れた、母語話者は使用していない学習者の「壊す」の産出は、L1 pwuswuta の影響であると考えられるが、L1 においても pwuletulita という動詞で使い分ける「枝を両手で折る」場面に「切る」を代用する傾向にあったことは、L1 の影響であるとは考えにくい場合である。このような項目に関しては、L1 の影響より他の要因が働いている可能性があると思われる。なお、L1 産出語数は L2 産出語より多く、L2 の 1 語が L1 の複数の語の意味を担っている可能性がある。

3.3.2. 使い分けのパターンの相関

全体の動詞の使用パターンにおいて、学習者による語と語の使い分けのパターンと、日本語母語話者による使い分けのパターンがどの程度類似しているかを調べるために、各ビデオに対して各動詞を産出した頻度を使って相関係数を求め、各グループごとに産出した。この値は、どのビデオ同士が類似した動詞の使用パターンを見せたかを示す。なお、この値で各グループの相関を調べた結果、学習者と日本語母語話者の使用パターンの相関は $r=.546$ ($p<.01$)、学習者の L2 使用と学習者の L1 使用パターンの相関は $r=.530$ ($p<.01$) であり、学習者は母語の使い分けとも、日本語母語話者の使い分けとも異なるパターンをしていることが分かった。

4. 結論と今後の課題

本研究は、韓国人日本語学習者を対象に切断・破壊事象に対する動詞の分けの習得状況を調査し、そこに L1 の影響や特定動詞の汎用が現れるかについて検討した。調査を通しては、学習者の切断・破壊動詞の使い分けのパターンは、日本語母語話者とは異なるパターンをしており、学習者は母語話者が使用しない場合にも特定動詞「切る」を頻用していたが、そのような使い分けのパターンにおいて L1 の影響は部分的に見られ、学習者の使い分けは L1 の影響よりは L2 動詞の意味構造の理解が不十分なことに起因する可能性があることが分かった。しかし、「切る」や「caluta」の産出が促される場面が多かった本研究の題材の特性を考慮すると、日韓両言語動詞の対照などにに基づき、その特徴が整理できる基準をもって様々な動詞が産出できる場面を想定し項目を作成するなどが、今後の研究において必要であると思われる。

参考文献

- 佐治伸郎・梶田祐次・今井むつみ (2011) 「L2 習得における類義語の使い分けの学習 - 複数のことばの意味関係理解の定量的可視化の試み」 *Second Language* 9, 83-100
- 網井勇吾 (2013) 『外国語学習者によるの意味獲得関す研究 - 英語の「壊す／切る」系動詞を例として - 』慶應義塾大学院政策・メディア研究科博士論文 (未公刊)
- 松田文子(2000) 「日本語学習者による語彙習得－差異化・一般化・典型化の観点から－」『世界の日本語教育』10号, 73-81
- Bohnmeyer, J., Bowerman, M., & Brown, P. (2001). Cut and break clips. In Stephen C. Levinson & N.J. Enfield (eds.), *Manual for the field season 2001*, 90-96. Nijmegen: Max Planck Institute for Psycholinguistics.
- Bowerman, M. (2005). Why can't you "open" a nut or "break" a cooked noodle? Learning covert object categories in action word meanings. In L. Gershkoff-Stowe & D. Rakison (Eds.), *Building object categories in developmental time*, 209-243. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Majid, A., Bowerman, M., Van Staden, M., & Boster, J. S. (2007). The semantic categories of cutting and breaking events: A crosslinguistic perspective. *Cognitive Linguistics*, 18, 133-152.
- Fujii, Y.(1999). The Story of 'break': Cognitive Categories of Objects and the System of Verbs. In *Cultural, psychological, and typological issues in cognitive linguistics: selected papers of the bi-annual ICLA meeting in Albuquerque*, edited by Masako K. Hiraga et al.(pp.313-332). John Benjamins.